

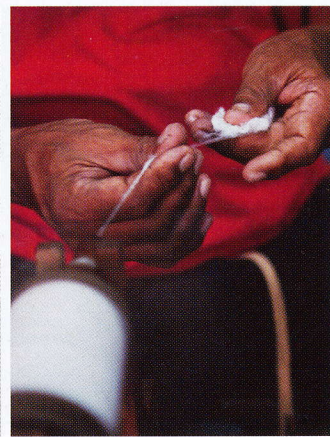
Batik Print

自然を尊ぶ布。

インドネシア人にとってバティックは
熱帯の陽光を遮り、心地よい風を通す、
もうひとつの皮膚のようなもの。
身体を飾る紋様は、自然を写すシンボル。
そこには人々の願いが込められています。



常に一定の速度、テンションを保ちつつ、極細の繭糸が途切れないよう加減をみながら糸車を回転。
作業は朝8時からお昼1時間の休憩を除いて、夕方までたゆみなく。

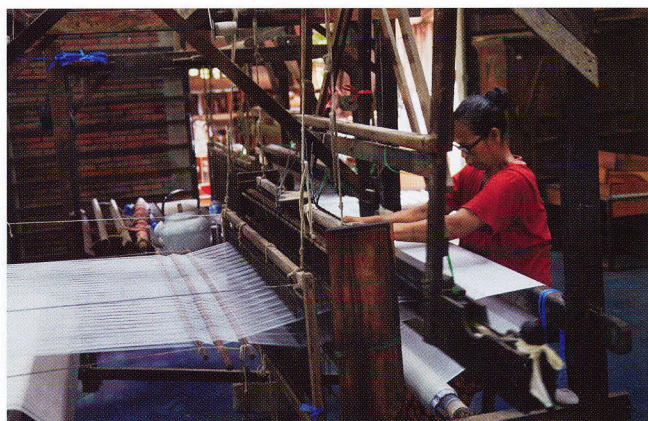


お湯に浸して柔らかくした繭を手でほぐし、優しく繰りながら1本の生糸に。太さはほんの2デニール程度。髪の毛1本=50デニールといえ、いかに細いかお判りいただけるでしょうか。

バティック発祥の地で 遺風を受け継ぐ「ビンハウス」。

ジャワ更紗の名で親しまれるバティックは、古くからインドネシア各地で作られているろうけつ染めの布。首都ジャカルタから飛行機でおよそ1時間の地にあるジョグジャカルタはバティック発祥地のひとつです。京都市と友好提携を結ぶこの都市は、北西にはダルマトゥンガ王治下の8世紀末に建てられたボロブドゥール寺院、東にはその1世紀後に完成したフランパン寺院が対座し、ジャワ建築の最高峰とされるこの二つの世界遺産が、往代の文化の高さを物語っています。1945年の独立戦争に貢献し特別州となった同市は、クラトン（王宮）を中心に栄えた街。いまは外国企業参入による急速な近代化が進み、過去と現代が交錯するような混沌とした空気に包まれています。2009年にインドネシアのバティックが世界無形文化財に認定されてから、政府がその着用を奨励、「バティックフライデー」（金曜日にはバティックを着よう）という言葉もあるように、街中には色とりどりの布に身を包んだ人々が。伝統的なカイン・パンジャン（腰布）を巻いて最新のスマホを操作する姿は、ちよと不思議な印象です。

今回制作を依頼した「ビンハウス」の工房は、ジョグジャカルタからさらに車で2時間のソロという古都にあります。街の喧騒を抜けた閑静なエリア内にある工房にDAMACASAは取材に伺いました。門をくぐると、樹齢何百年の神樹が豊かに梢をひろげ、ブルメリアや南国の花々が匂やかに咲いている、今号のカバーを飾った庭園があります。敷地奥に進むにつれ、それまで聞こえていた鳥たちのさえずりが次第に「カタン、カタン」という小気味よいリズムに変わっていきます。工房ではDAMACASAが発注



直射光を遮ったスペースで、心地よい手織り機の音とともに真っ白な地紋が織り出されます。

した夥しい数のバティックを、いままさに制作している最中でした。女性オーナー、ジョセフィーヌ・W. コマラさん率いる「ビンハウス」は、失われつつあったバティックの伝統製法を復活させたことで、インドネシアではその名を知られる有名な存在。また通常のコットンと二線を画す、手紡ぎ手織りのシルクバティックを扱っているのも特徴です。工房に入ると、大きな器に山のように積まれた繭（まゆ）を二つひとつほぐしながら生糸にする練糸職人が。糸巻きは自動でなくペダルを漕ぐように足で操作していて、手と足の器用な連動に思わず目が留まります。傍らには繊細な生糸を適度な太さに捻り合わせる、紡ぎ車を廻す女性たち。こちらカラカラと休みなく、ゆったりと時を刻むように軌を描いていきます。こうして手で紡がれた絹糸は微かに空気を纏って、輝くばかりの光沢と優しい風合いを放ちます。